玄遠俳句

平成30年 1月号

冬の韓国　早村　春鶴

時差ボケの無き隣国も年の暮
歓待の出迎へありて小六月
初雪のわずかにありし街ソウル
韓料理挑みて楽し街師走
チマチョゴリ着て華やける街小春

初　雪　一谷　春窓

山国といへど初雪降り滞(なず)む
（滞む＝とどこおる）
初笑孫の名前を呼び違(たが)ふ
願ひより祈りの増えて初詣
和服着て母の面影初鏡
面差しの母似諾(うなべ)ふ春小袖
（諾ふ＝同意する）

師　走　山本　春英

新曲にいどみしピアノ冬の月
師走来る鍵かけ忘れ引き返す
書に挑む気力はあれど年の暮
高校を決めかね父娘師走中
次々と喪中のハガキ十二月

冬　日　山岡　扶佐

師走なり文面のなき便り来て
久しぶり会ふ友笑顔冬座敷
姦(かしま)しく蟹鍋囲み時忘る
遊具皆止まりし生駒山眠る
炉開きをせかす老母の背の丸く

年忘れ　東原　春城

白障子親子の会話弾みをり
裸木の公園広く枝天に
冷めたさに駅の手すりに肝ひやす
走り去る車のあとを枯葉追ふ
順番に慣れぬカラオケ年忘れ

冬の景色　山内　松琴

湯豆腐を夫婦(めおと)で抄(すく)ひかわす酒
退院日小春日和に友の声
窓際の小春日和に寝すごして
天を指すメタセコイヤの冬木立
吊し柿のれんの幅に里景色

秋まつり　北畑　芳草

父と子の揃ひの法被(はっぴ)秋祭
天高し空にすわれし笛太鼓
母とみしあの日も晴れて秋祭
亡き母も早や三回忌秋深し
窓辺よりさし込み光る臥待(ふしまち)月
（前月未掲載分）

秋惜しむ　北畑　芳草

亡き母の部屋に日のさす冬座敷
山茶花の主なき庭散り初むる
もみじ掃く寺の僧にも朝の風
厨房に冷めたさしみる朝夕べ
佛前に今朝もあいさつ菊佛花

玄遠俳句

平成30年 2月号

凍雲（いてぐも）　早村　春鶴

凍雲に中天の月動かざる
ビル照らすスーパームーン寒の月
籤引けば大吉ばかり初詣
神を呼ぶ宮司の声す初御空
酌みかはす書仲間ありて年酒酌む

寒の月　一谷　春窓

転ばぬやうそろりそろりと雪の道
寒の月湖は平かに眠りつく
研ぎ澄ます鎌見るがごと寒の月
ほぐしやる身は孫の口ずわい蟹
春近し補助輪取れて得意顔

冬の路　東　素子

真鴨寄る小さき水面の波紋寄る
寒風を総身で受けて横断路
残照の輝やき背中（せな）に冬路行く
夫（つま）見舞ふ長き影添ふ冬の道
冬日背に帰路の虚空の何処（どこ）までも

新年会　山本　春英

シャンソンで乙女文楽新年会
あでやかに浄瑠璃であけ新年会
初旅を卒業旅行に高校生
かわりなく料理づくりの三ヶ日
重さうな雪雲おおう街に立つ

去年今年　山岡　扶佐

父植えし寒菊開花仏花とす
記名する家族の箸紙墨の濃く
あつあつの白味噌雑煮義母好み
初稽古子等のエナジー受けとめて
風冴ゆる書展めぐりて目習ひと

新春互礼会　山内　松琴

つま先の冷えて足早や帰路遠し
新春の老（おい）の楽しみ互礼会
ゆずり葉の葉先のしずく空うつす
新年の集ひに会へし墨の縁
師に会えてつのる思ひや初御空

新年　北畑　芳草

縁側に水仙香る母好み
幸祈る拍手（かしわで）大きく初詣
庭先の赤き南天なほ赤き
母の味守りし雑煮仏飯に
我が弟子の手作りなりや注連飾（しめかざり）

冬日　東　素子

ゆずり合い会話の生まる駅舎冬
手編布団駅舎の椅子に冬日射す
ひとすじの道に影伸ぶ冬日背に
木枯や子等遊ぶ街乗り継いで
日射し受け誇らし気なる石蕗（つわ）の花

（前月未掲載分）

玄遠俳句

平成30年 3月号

春立ちぬ　早村　春鶴

節分の鬼は園長ばれてをり
齢の数節分豆を完食す
久々の好天続く節分会
立春の光を浴びて旅仕度
一片の雲を浮かべて春立ちぬ

春めく　一谷　春窓

かもしかと不意つく出合ひ春の山
雨降ればつひ寝てしまふ春炬燵
派手目なる色も又良し春ショール
子等と見る皆既月食残る雪
天地やひと雨ごとに春めきて

雪山　東　素子

初雪や薄化粧せる黒き土
双手もて空と雪山掬ひけり
除雪せし上に降り積む今日の雪
いつまでも溶けぬ塀際雪恨む
敷石の雪を払ひし竹箒

冴返る　山本　春英

吾ひとり夜半の家路や冴返る
マスクして来る子気になり吾もして
留守番の子にご褒美の冬いちご
風花や歌声もれくるコンクール
バケツ中何年振りか薄氷が

寒明け　山岡　扶佐

天空の赤き月蝕風冴ゆる
待ちきれず一人豆撒したといふ
節分の恵方教へて寿司売り娘
寒明の雪どっと来し日本中
早春の祝日富士は姿見せ

初雪　東原　春城

皮膚癌の老母をおそふ寒最中
初雪や路傍の石の薄化粧
初雪や赤き手袋おとしをり
への口で寒風受けし石佛
路地裏をはしる寒風戸をたゝく

春著　山内　松琴

一月のスーパームーン道照らす
散歩道流れる鴨に歩を合わす
雄鴨や色目の派手な粋な羽
春著着て歌劇の館華やいで
春著着て薄着で過ごす乙女らは

猫やなぎ　北畑　芳草

虎落笛家路を急ぐ我が背中に
水仙の凛として立つ庭の隅
玄関の花びんに一本猫やなぎ
籠中の食材今夜は皆おでん
露天風呂湯気のむこうは雪げしき

蕗の薹　稲代　英明

長靴すべり転びし先に蕗の薹
節分の行事は寿司の丸かぶり

初明り　東原　春城

淀川の水面煌めく初明り
春著着て袖の長さを確かめり
寒稽古靴紐締めてマラソンに
パーカーのフードはづして冬の音
福引で運気を夫にたくしけり

（前月未掲載分）

玄遠俳句

平成30年 4月号

春めく　早村　春鶴

園庭に声のはじけて山笑ふ
耕せる大きな農機女手で
水底の魚影すばやき水温む
春めきて心はすでに浪速路へ
江戸期より咲き継ぐ鉢の盆梅展

凍解け　一谷　春窓

凍解けの湖から海へ長き旅
凍解けの湖蕭々と雨の降る
春ショール粋にまとひし老女かな
瞬くことすらさせぬ春一番
無人驛出入り一つ鳥帰る

春溜り　東　素子

長き影跡切れし道薄氷
畑打ちの音柔らかに宙に跳ね
春溜りスマホゲームの子等は溶け
縄跳びの御下げの飛翔春掴む
陸橋を貫く車窓春を撒く

大掃除　山本　春英

春一番逆らい進む自転車かな
リーダーの意志の硬さや鳥帰る
つつがなく卒業せし子母亡くも
思い出の品捨て切れず大掃除
風強き大地に根づくすみれ草

暖か　東原　春城

春雨や土の香を散らしけり
暖かや鍵かける手軽やかに
ネイルした手に花鋏牡丹の芽
老夫婦無言で重宝春炬燵
手術後の母に含ます春の水

春一番　山内　松琴

春一番眼科に内科梯して
春一番小さき帽子屋根の上
雨風に目ざめし夜半の春一番
満開を期待せし梅まだ堅し
新若布だけの味噌汁香り立つ

春の風　北畑　芳草

寒つばき一輪なれど華やいで
ランドセル背に待ちきれず春の朝
園庭にはしゃぐ声して春の風
自転車と頬をなで行く春の風
梅林をぬけて茶店の赤毛氈

春の土　稲代　英明

公園で軽く目をとじ春陽浴ぶ
五輪旗に込めたる闘志雪の果て
大試験終へてそよ風頬なでる
白酒を見て見ぬふりの断酒中
春の土素足で踏んで確かめる

春時雨　貝賀加代子

小雀の羽休めをり春時雨
山茶花のなほくれないの散り初むる
節分の豆を拾う日誕生日
気がつけば喜寿迎へをり去年今年
書初のとめはね忘れ姦しく

玄遠俳句

平成30年 5月号

花冷え　早村　春鶴

花冷や妻に頼りし旅支度
葉桜や平和の鐘の鳴る安芸路
帰路はみな寡黙となりて花疲れ
縁側の猫大あくび長閑なる
旅装解き予定なき午後長閑けしや

種選み　一谷　春窓

長閑なる波に揺られて浮寝鳥
糸柳揺るゝ銀座の人の波
庇打つ雨に種蒔く時を知り
物種の蒔きどき祖母の日記帳
祖母記す種の蒔きどき種選ぶ

春　暁　東　素子

春暁を覚めんと永久に夫逝かむ
この渇き春暁の膚いや荒れて
ほろほろと虚しき想ひ木の芽吹く
空席に桜花の一枝御神酒添え
夕桜墨磨るしじま掌の中に

花　筏　山本　春英

祖母二人入学式で長話
ちぎれ雲鳥とあそびて長閑なる
池めぐり花の筏のついて来し
碧天を突き射すがごと紫木蓮
新鮮さ売りて花添へ道の駅

惜　春　山岡　扶佐

花さわぐしばし風中研修会
墨つきし手のまゝ食むる草の餅
長閑けしや道往く鼻唄爺と孫
春昼や畑の薀蓄聞くといふ
思い出の書作開けつゝ春惜しむ

沈丁花　東原　春城

名前呼ぶ老医の声の長閑けしや
紫にけむる生駒の山のどか
ゆるゆると音符の如く花筏
遠くより落花の中の救急車
沈丁花香に導かれ友の家

長　閑　山内　松琴

動かざる堀の淀みに花筏
長閑けしや菅笠かぶり堀めぐる
長閑なる水の流れもゆるゆると
ゴルフ場打球の音さえ長閑なる
打球音芝に吸われて長閑なる

桜　北畑　芳草

教場の出向かえ一番山桜
春彼岸過ぎて墓地へと母遺骨
子等の声渓に谺し長閑なる
陽の射して猫の居眠り長閑なる
長閑なる境内の鳩二羽三羽

落　花　稲代　英明

古里の筍恋し墓地参道
木蓮に早くも緑芽生えきて
手遊びに折る千羽鶴長閑なり
常夜燈落花を照らし帰路せかす
卵焼なくて不満の花の宴

卒　業　貝賀代子

梅林や枝の頬つく香に満ちて
土筆摘む土手転がりし幼き日
仰ぎ見る空に雲なく卒業す
東北の地震の悲劇も春の海
人住まぬ庭の梅花は姉好み

春　隣　山岡　扶佐

探しをる写真見つけし春隣
三老師柔和な顔の春写真
老猫も会話の仲間菜種梅雨
探し物出でしは花の誕生日

（前月未掲載分）

玄遠俳句

平成30年 6月号

卯の花腐し　早村　春鶴

大杉を丸ごと占拠藤の花
用水の流れ速きに夏来たる
茄子苗の品種を変へて名札つけ
農良仕事卯の花腐しひと休み
鉄線花空の碧きを順に受け

新　茶　一谷　春窓

雨の来て土の匂ひの蕗畑
白衣見て子の泣き止まず夏の風邪
友の来て話は尽きず新茶汲む
師の逝きて早や三回忌梅雨曇
子に語る田植え休みの無き今を

若　草　山本　春英

雨戸開け風吹きぬけし竹の秋
柔らかき若草児等の手に余る
行く春に整理整頓出来ぬまゝ
春深し書展出品思案中
師の顔に似て動かざる春の雲

母の日　東原　春城

踊子草大樹のもとの初舞台
旅先を決めかをりし鉄線花
バラの棘除きて贈る母の日に
一人ッ子なれども粽三つ求め
春昼や墨する爪も黒々と

明治村　山内　松琴

友の庭友の顔似の鉄線花
クレマチス自由に伸びつ支え合ふ
明治村坂走り来て若葉風
揺れ動く青葉の中の明治村
窓際の席に誘われ青紅葉

鯉のぼり　北畑　芳草

天空をひと飲みせんと鯉のぼり
老鶯の鳴く声遠き農作業
緑増す畑に座して昼餉とす
仏飯に母の好みし柏餅
人並にもまれ流されつつじ園

春めく　貝賀賀代子

陽の落ちるまで寝てしまひ長閑なり
入学児黄色帽子の一列に
髪ショート白きスニーカー春めく日
明け方の春雷近し身を起こす
雨の来て墓石を覆ふ山桜

玄遠俳句

平成30年 7月号

鴨足草（ゆきのした）

早村　春鶴

七曲して峠道七変化
紫陽花の花の海なる三室戸寺
緑陰の広さに園児ちり散りに
午後になり外出中止する暑さ
灯籠の陰に花あり鴨足草

雲の峰

一谷　春窓

頂上へ径狭まりぬ岨（そば）清水
様変はる銀座通りの夏柳
炎昼やホームの端のエレベーター
写生の子画紙いっぱいの雲の峰
旅立ちの朝の水遣り夏の蝶

螢

東　素子

水槽で螢育む時空飛び
今年また螢談義に集（つど）ふ友
喜々として肴は螢盃重ね
青春の螢の縁（えにし）喫茶店
夢中の故里変はり螢狩り

木下闇（こしたやみ）

山本　春英

師の眠る高野の山の木下闇
紫陽花の家主を褒めて帰路急ぐ
夏布団蹴りていびきのなほ高し
新築に似合ふ木の香とアマリリス
娘の思案クラブの有無で梅雨に入る

梅雨晴間

山内　松琴

植田みな風の波うむ水面かな
紫陽花の続く有馬路湯の香り
新生姜（しょうが）極薄切りで腕の冴え
燕（つばくら）の水面かすめる飛行術
梅雨晴間山より低き虹見つけ

潮干狩

稲代　英明

代田のみ眼下にありて雲浮かべ
潮干狩見つけし熊手錆びてをり
江戸期より花咲き継がる鉄線花
はや夏日屋外作業熱中症

鯉幟（こいのぼり）

貝賀賀代子

離れまじ支柱にしっかと鉄線花
母の日や宅急便の車来る
病床の姉に鶴折る五月雨
鯉幟ビルの狭間に立ち泳ぎ
目に見えて野山を埋める若葉かな

五月雨（さみだれ）

東　素子

五月雨を伴ない永久の別れとや
幽明の境五月雨重たかり
天地（あめつち）の仲隔（へだ）つは時五月
五十日祭遥けき皐月（さつき）空碧し
地の中へ涙押しやり五月雨（さみだ）るる

玄遠俳句

平成30年 8月号

炎天下　早村　春鶴

汗の顔拭く手も玉の汗の粒
七夕の園児の願ひお菓子屋と
炎天下豪雨惨禍の村作業
老鶯の鳴きそこなひて飛び去りぬ
村作業終へてビールのほしきとき

夏座敷　一谷　春窓

気短かに来たる夕立去るもまた
風入れて灯さぬまゝの夏座敷
懐に山風孕む夕端居
鳶の輪の下に晩夏の湖蒼し
書と曝す栞の隅に夫の文字

さくらんぼ　東　素子

七月の豪雨惨禍に無事祈る
大雨に冴えし紫茄子三ヶ
洪水におののき新た青芒
街中の路辺に残りし草いきれ
みちのくの旅のおまけやさくらんぼ

夏書展　山本　春英

夏舞台眼ざし母へバレエの幼児
大蚊の小さき葉裏に身を隠す
二の腕に涼風ありて走りたき
梅雨出水淀川越えて娘は出かけ
入賞の「愛」は友の字夏書展

鉄線花　山岡　扶佐

クレマチス一片残し散り終えぬ
母愛でる父の育てし鉄線花
白あじさい加えて仏花重たげな
余震来て寝むれぬ夜の男梅雨
紫陽花のさし木易しと人の言ふ

茅の輪　山内　松琴

身も縮む七夕豪雨寝れぬ夜
間違えて茅の輪くぐりを二度くぐり
七夕の逢い引き阻む雨の音
書の腕のあがるを願ひ笹飾り
七夕や宇宙に懸かる大ロマン

七夕　北畑　芳草

園児等の七夕飾り読めぬ字で
ささ細く七夕飾り重たげな
真夏日となりし我が街被害なく
炎天下京の舞妓の凛として
艶やかに踊る舞妓の夏であり

梅雨　貝賀賀代子

古寺や今満開の百日紅
更衣通勤通学白き波
雨上る雫一粒七変化
梅雨曇滲み広がる墨淡き
新茶の香して箸すすむ今朝の膳

五月雨　稲代　英明

五月雨の心地よき音酒肴
雨止んでお地蔵様に紫陽花を
子つばめの口のみ見えて軒の下
父の日に父の写真に掌を合わす

杭州西湖に遊ぶ　山岡　扶佐

見上げたる泰山木の花真白
西湖畔蓮華の開花音聞けず
ふいにきてふいに去り行く糸蜻蛉
西湖畔至福の一服風薫る
糸蜻蛉旅の別れを惜しむかに

玄遠俳句

平成30年 9月号

秋めく　早村　春鶴

碧空の雲の流れも秋めいて
洗ひたる硯に墨の真新し
鯛のぴたりと途絶へ山暮るゝ
新涼をもらひ身仕度村作業
僧も又農を語らふ稲の花

星月夜　一谷　春窓

残暑の字消し跡残る孫の文
紅葉山木曽の千本格子かな
槍・穂高信濃に生まれ月の道
鍵穴に秋の日蚕糸博物館
ビル屋上クレーンの先の星月夜

稲の花　山本　春英

盂蘭盆会老僧の経堂に滲む
草市の参道長し寺の門
草野球する児にエール稲の花
どの駅も短冊ゆれて星まつり
公園のまだ声もして法師蝉

秋茄子　東原　春城

台風の避難勧告真夜中に
強風に堪へしひまわり咲き満ちて
初盆に愛弟子の星一つ見る
鶏頭で店先占拠存在感
秋茄子の一個にレシピ迷ひけり

遠花火　山内　松琴

極暑の日友より届く野菜暑
満員の地下鉄下駄の花火客
遠雷のごと連発の遠花火
しきりなる稲妻パジャマ同じ柄
ふいに来てすぐに啼く蝉顔の横

蝉　北畑　芳草

早朝の蝉の時雨にふと目覚め
かべ板に空蝉（うつせみ）一つ風にゆれ
マンションの小さき木々も蝉時雨
蝉を追ふ母子（おやこ）の網の短くて
撒水に驚き蝉の声残し

七夕祭　貝賀賀代子

プール行く老ひにあらがふ日課なり
球児等の汗と歓声甲子園
我が家にもゴッホが愛（め）でし向陽葵が
空蝉（うつせみ）や古歌に詠まれし風情今
七夕の歌聴こえくる幼稚園

半夏生　稲代　英明

短冊に仮名文字流る星まつり
撫（な）でてみて痛みなき脚半夏生
家を出て早や腰くだけ暑気あたり

玄遠俳句

平成30年 10月号

刈田

早村　春鶴

枝豆の翡翠色試食ゆで不足
秋晴を二つに分けて飛行雲
秋晴に野外給食児等円陣
秋の日を背に行かねばならぬ書展
皆刈田なれど一枚休耕田

松手入

一谷　春窓

朝時雨県歌流るる駅舎かな
紅葉径曲がれば古びしネオン街
職人の悔やめる一枝松手入
墓地参道跼(かが)む低きに笹龍胆(りんどう)
朴(ほう)落葉風のうねりの形して

秋の蝶

東　素子

秋蝶の誘いあらたに路地に入る
黒揚羽ビードロに透古里(すけこり)の秋
漆黒(しっこく)の極み秋日に黒揚羽
水の浮く轍(わだち)に秋の蝶群れて
秋蝶の身じろぎもせず時刻む

夏休み

山本　春英

痛風を病む夏休み家の中
稲妻の山切る刃(やいば)一瞬に
秋の蝶羽根休めたる水たまり
蝉死すや土に返して掌を合わす
秋灯下脚影長きバレエの子

秋高し

北畑　芳草

ボランティアの二歳児救助秋高し
朝夕に冷(ひや)やかありて食進む
災害の跡地に涙秋の雨
颱風の恐怖は倍加一人居に
こおろぎの鳴きしを耳に癒(い)やされて

枝豆

山内　松琴

枝豆を肴(さかな)に一杯夫(つま)の留守
雑用に追われ流星追へぬまゝ
極暑耐へ起筆に込めし強き線
枝豆を一品加え夜の膳
枝豆の紫頭巾は丹波の出

原爆忌

貝賀賀代子

濃緑の苦瓜カーテン実をつけて
老い集ふ今年が最後原爆忌
書展間近硯洗へば気合入る
一人居の盆賑わひし子や孫と
稲妻の光走りて闇戻る

残る蝉

森本　智子

三十一字渇筆となるこの炎暑
無念なる魂数多(あまた)原爆忌
風通る無人の駅舎秋立つ日
残る蝉短く鳴きていづこへか
闇の田を稲妻射すや汽車の窓

玄遠俳句

平成30年 11月号

秋の雲　早村　春鶴

秋高し空より海の碧深し
海の色秋の入り日に染りたる
秋晴や刻待たずして雲の消へ
空中のビルの窓には秋の雲
ビル群の上にぽっかり秋の雲

木守柿　一谷　春窓

軒下にいつしか集ふ枯れ落葉
井戸端で囁くがごと枯れ落葉
白鳥の首を自在に諏訪湖上
木守柿落とし日暮の風萎へる
孫の声大きく王手初炬燵

晩秋　東　素子

三年振り軽き抱擁暮の秋
フランスの友と墨蹟黄葉中
晩秋のあふるゝ地形や美術館
大銀杏小さき葉のあと実は鈴に
晩秋に浸り美を愛でティータイム

秋の朝　山本　春英

痛風やしばらくぶりに枝豆を
秋の夜や塾舎の灯つきしまゝ
十五夜やはずむ会話の父と子で
涼しさについ手を伸ばす掛ぶとん
鐘ならし豊洲の競りの秋の朝

障子張り　山内　松琴

亡父の夢見たよな秋の朝早き
入賞に水引草のなお赤き
秋風や琵琶湖湖畔の宿静か
障子張りの終へて生花と書に浸る
幼な児へひと枝折りし金木犀

秋の空　北畑　芳草

亡母に似し雲流れ行く秋の空
親と子の競技もはずむ運動会
何ごともなきまゝ颱風北上す
刈り時を待ちし稲穂の重たげに
いさましきそろいの法被秋祭

台風　貝賀賀代子

秋彼岸墓苑はるか香の煙る
敬老日終の栖を探しをり
秋霖や鞄頭に駆けし少女等
流れ狂ふ颱風去りて吐息のみ
塩味を飛ばす枝豆おちょぼ口

毬栗　森本　智子

夕茜藁匂ひたつ刈田かな
毬栗のひとつ落つるや古墳跡
赤き実に埋まりて吸ふ放屁蟲
屋根崩れ瓦礫の山や狗尾草
枝豆に小さき手も伸び殻の山

玄遠俳句

平成30年 12月号

木枯　早村　春鶴

凩が吹き寄せし人列なさず
時雨傘一度もささず旅の荷に
一枚になりて枯葉の風に耐ゆ
歯の治療終へて小春日歩のゆるむ
遅延せる列車待つ間の日向ぼこ

寒夜　一谷　春窓

まとまらぬ原稿眺む寒夜かな
ひと雨の後の静けさ敷松葉
寒菊を供へ来し方語る夜
古稀迎へまだ夢捨てぬ寒牡丹
湯上がりの肌に針刺す寒さかな

帰り花　東　素子

再びの書展はなやぐ帰り花
廃校の書展開幕温め酒
無会派の書展に誇り寒牡丹
強き線魂を秘め里の秋
書人皆人格核に冬紅葉

冬近し　山本　春英

教室にぬれて来る子に秋時雨
中天で我を照らせし後の月
吾八十路気づかいせぬ息子冬近し
門柱の如く二本の破れ芭蕉
丹精の盆栽すでに薄紅葉

今朝の冬　山岡　扶佐

今朝の冬駅に園児の声響き
小さき背にリュック重たげ今朝の冬
門前に雅楽流れて神の留守
小春日を神馬楽しむ午後となり
大根引き細きは全て自家用に

日向ぼこ　山内　松琴

図書館の椅子を確保し日向ぼこ
秋バラや二輪競ひて今日咲きし
町会の清掃活動紅葉狩
添ひ花としてゆれ動く吾亦紅
師の教えわからぬまゝに日向ぼこ

日向ぼこ　北畑　芳草

日向ぼこ二匹の子猫庭の隅
日向ぼこ熟睡犬の腹を見せ
老人の話し込む背や日向ぼこ
ハラハラと散りゆく紅葉地を埋めて
吐く息の見えたる朝の落葉はく

秋桜　貝賀賀代子

我が街の銀杏黄葉や御堂筋
石仏に添ひて愛らし秋桜
我孤愁春日の山に鹿鳴きて
木犀の匂ひを引きて葬の列
白き城見上ぐ秋天なお碧く

小春日　稲代　英明

小春日のぬくもりもらふ家路かな
荒れ狂ふ雨風去りてそばの花
小春日やゆっくりゆくり歩く猫

秋天下　森本　智子

稲架掛にみどりのありて刈り急ぐ
二つ三つ色づきおりて青みかん
穭田の穂の細まりて日の暮るる
菜園の一枚あまた秋の蝶
秋天下ひと皆ひとり伸びをする

秋天　山岡　扶佐

いわし雲流れやわらぎ深呼吸
遠方の老師健脚秋書展
秋書展幾多の助けうけ安堵
颱風に夫身構えてヘルメット
秋天に深呼吸して書展へと

（前月未掲載分）